
BIJIN

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BIJIN

【Nコード】

N2911BA

【作者名】

春

【あらすじ】

”美人薄命”の宿命を持つ”美人科”の人間が、短い自分の人生をどうにかするお話です。どんな内容になるのか作者にも分かってませんっ！

美人薄命

赤ん坊が母親の胎内から外へ出てくるとき、黄金の光を放ちながら生まれてくる子がいる。

その子たちは皆、”美人科”と呼ばれている。

美人科の子供たちは、玉のように美しい容姿をしているが、寿命が短い。

という”美人薄命”の宿命を背負っている。

そして今日、新たに美人科の人間が誕生した。

この子もまた、それはそれは盛大に光り輝いて生まれてきたのだった。

美人科に遺伝は関係しないため、生まれてこないと分らない。

その場にいた助産師や看護師たちは突然の出来事に驚き、ただただ目を丸くするだけであった。

月と青と雪。

「おぎゃー！おぎゃー！」

『・・・！！』

温かくも豪快に光を放つ赤ん坊を目の前に、看護師たちは眼球が落ちそうになるくらい目を開いている。

『あのー看護師さんたち？早くその子を産湯に入れてくれませんか？』

『！え、ええ！そうですね』

母親の声で我に返った看護師たちは、まるで何百億もする宝石を運ぶようにその赤ん坊を産湯へと連れて行く。

産湯に浸かった赤ん坊は、まもっていた光を静かに収めた。

『それで、その子は男？女？』

『ああ、えっと、元気な男の子ですよー』

『男？エコーでは女で間違いないと言っていたのに・・・』

まあいいかと呟いた母親の顔は出産の疲れの他に、何やら複雑な表情をしている。

しかしその表情は次第に緩くなって、彼女は深い眠りへと落ちていった。

病室にて。

あの赤ん坊の母親が眠りから目を覚ますと、そこには長身で人当たりの良さそうな好青年が立っていた。

『・ん・青人^{あおと}』

『月！頑張ったね！ありがとう、元気な女の子だね』

『何？今なんて言った』

『うん、だから元気な女の子をありがとうって』

『女だと？あの看護師、光に目がくらんで性別も区別できなかったのか・・！』

彼女は左の拳を思わず握りしめた。

『光に目がくらんでって・・まさか、あの子・・・』

『ああ。美人科だ。間違いない』

『わーーーー！でかしたよ月ーーーー！最高！！愛してるーーーー！！』

青人は月を思い切り抱きしめようと飛びついたが、月は片手でそれを阻止した。

『やめろ』

『産後のわりにすごいパワーだね』

『・・・』

月は先ほどと同じく、少し考え込んだ表情をした。

『どうしたの？嬉しくないの』

『別に。自分の子なら、男でも女でも、普通の子でも、そうでなくとも・・・嬉しい』

『でしょう？君が悩んでることは分かるよ。もしかしたら僕たちよりも早くに死んでしまうかもしれない』

『・・・！』

青人のストレートすぎる発言に月は身体を硬くする。

『でもさ、生まれてきたばっかの子にそんな夢も希望もないこと考えたってどうしようもないでしょ。僕は、あの子が大きくなったら何をしようか毎日楽しくてしょうがないよ。まあ、月とあの子は絶対僕が幸せにするから悩むことなんて何もないよね？あ、名前どうしようか？？』

『青人・・・』

前向き過ぎるほど前向きな青人は、こうやっていつも月を支えてきた。

そんな青人に月は涙を滲ませる。

『なにー？泣くほど俺のこと惚れ直した？嬉しいなあ』

青人は月を優しく抱き寄せ頬にキスをする。

『雪にしよう』

『雪？』

いきなりの提案に月は目を丸くする。

『うん。今日はロマンチックにホワイトクリスマスだし、君に似て雪のような白い肌だったから。それに、雪のようにまっさらな人生を歩んで欲しいという願いを込めて。どう？』

『青人にしてはなかなかだな』

『お褒めの言葉ありがとう』

そして、あの赤ん坊は東雲雪しのめゆきと命名されたのであった。

雪の過去。

「お母さん、行って来ます」

『ああ、気をつけて』

あれから19年の月日が経ち、雪は19才となりアルバイト生活を送っていた。

彼女は高校を卒業後、大学へと進学したのだが、少々問題を起こして辞める羽目になってしまったのだ。

彼女は美人科の人間だが、本人はその問題が起こるまで自分が美人科であることを知らなかった。

それ故に起きてしまった問題である。

美人科の人間は、生まれた瞬間のあの光以外では区別がつかないため、親が当人に伝えるなどしないと自分では分からない。

雪は両親から何も聞かされていなかったのだ。

また、危^{きれい}玲軍という美人科の人間を区別出来る能力を持った組織が存在していて、彼らは大抵美人科の人間が年頃になると現れるのだが、雪はなぜかまだ出会っていないかった。

普通、美人科が生まれた家庭では早々に、美人薄命の宿命対策をとる。

美しい様子のままだと力を使い、寿命を削る速度が早まるため、平凡な容姿になるための訓練をすることが主な対策内容である。いかに脱力し、力を使わずに済むかが課題であるのだ。

しかし、脱力モードに入っているつもりでも無意識にビューティーモードに入ることがある。

それは人それぞれである。

食事をするときにビューティーモードに入る者もいるし、運動をするときに入る者もいる。

他にも水を浴びたり、転んだときなどなど。

そして雪は夜、太陽の光が消えるとビューティーモードに入るというなんとも不憫な美人科であった。

ビューティーモードの最大の難点。それは人格が変わるという事である。

自分が美人科の人間であることを認知している者ならそれなりの対策がとれるのだが、当然雪にその術はなく、人格が変わっていることさえ気づいていなかった。

事件当日の出来事はこうだった。

日が沈み辺りが暗くなった頃、門限5時の雪は自室にいた。

「あ、学校に忘れ物しちゃった」

もちろん昼間の雪の性格と現在とは異なる。

「どーしよー、お母さんは買い物でいないし、お父さんはまだ仕事から帰ってきてない：よし！今のうちなら抜け出せる！」

何がよし！なのかは分からないが、こうして雪はそそくさと大学へと向かった。そして事が起こる。

『うわっ、ちょっとあの子見てみるよ。すっげー美人』

『マジだ！なあ、声かけてみようぜ』

どこの誰とも知らぬ男が、雪に声をかけた。

「ん？何か私に御用ですか？」

『君、暇だったらこれから俺らと遊び行かない？』

「私、今暇じゃないです！急いでます！」

『それは大変だ。良かったら俺の車に乗って行きなよ。送ってあげるから』

「本当ですか！？ありがとうございます。助かります！」

『じゃ車あっちだから。ついて来な』

「はい！」

『…くくく。何だ、あの子以外にちよいいな』

怪しげな男たちに連いていく雪。

そう、彼女はビューティーモードに入るとかなりの世間知らずとなるのだ。

そして連れられて行った先とは：

「やきとりあります…？何ですかここ。車ここにあるんですよね？」

『君って馬鹿なの？面白いこと言うね』

『ここは居酒屋。お酒飲むところ』

「居酒屋？お酒？だ、騙したんですか!？」

『まあまあ。いいから君も飲みなよ、おごるから』

「私まだ未成年です。お酒飲めません!」

『堅いこと言わない言わない。ほら、どーぞ?』

「ちよっ…んっ!」

無理やり酒を飲まされる雪。あれよあれよと空瓶が増えていく。

『良い飲みっぷりだねえ!ほらもつともつと!』

「はあーもう飲めまへんよ」

完全に雪が出来上がった所で店の扉がガラッと開いた。

『うわっ、やべっ!』

入り口には警察官がでーんと構えている。

どうやら店の中の誰かが警察に通報したらしい。

『君たちか?未成年者に酒を飲ませているのは!』

雪と男たちはこうして警察のお世話になった。

次の日の朝、雪はビューティーモードの自分が昨夜何をしたか、両

親にどれだけ叱られたかなどは、全部忘れている。頭が痛い理由が二日酔いとも知らない。

「おはよう…」

脱力モード（この時点では無意識）の雪は、かなりのローテンションである。

『おはよー雪。どうかしたの？』

「ちょっと、頭が痛いの」

『『…（そりゃそうだ…）』』

月と青人はこれを機に、雪に美人科の事実を伝える事を決心した。

この日、大学に行くと当然のごとく教師たちが雪に問いつめに来た。しかし、何のことやらさっぱり分かっていない雪は、はあ…などと聞き流していた。

その態度に教師たちは、聞いているのか！？反省しているのか！？君はいつも大人しくて優等生なのに、猫を被っていたんだな？！などど好き勝手に怒鳴りちらす。

流石にイラっときた雪は、

「何か私、悪い事しましたか？」

と言ってしまった。

事情を噂で知っていた周りの人間たちは、もうこいつ終わったなと

いう表情をしている。

その予想は大的中し、雪は退学処分を食らったのであった。

事実を月たちに聞いた雪は、ローテンションのまま静かに怒り、一週間ほど両親との間で冷戦が続いた。

『あゝ月々！雪が僕と口利いてくれないよー！！』

『私もだ。しょうがないだろ、諸悪の根源は私たちにあるんだから。青人いい加減うざい』

『っは！月まで僕を構ってくれなくなるの！？…寂しい…』

『…』

しばらくして雪の怒りが収まると、青人は必死に脱力モードについて雪に教えるのであった。

危玲軍現る。

とあるファミレスにて。

『雪ちゃんの髪の毛ってすっごく綺麗だよ。うらやましいなあ』

雪のバイト仲間の原田あかりが、頬杖をしながら呟いた。

「そう？ありがとう」

『ねえ、何か特別な手入れとかしてるでしょ？教えてよー』

「特に何も・・・美容室にも行ったことないし」

『えー！？美容室行ったことないの？』

あかりの高くて良く通る声がファミレス中に響き渡る。

「あかりちゃん声大きい。お客さんびっくりしちゃう・・・」

『お客なんて私たちしかいないじゃない。ね、じゃあ何でそんなに髪綺麗なのよ？』

「遺伝・・・かな？ごく希（まれ）に自分で切ったりしてるけど、最近には本当に何もしてない」

『遺伝？それじゃあ、真似できないね』

「真似するつもりだったんだ・・・」

それからしばらくあかりは雪をじっと見つめた。

「・・・何？」

『ん？雪ちゃん観察』

雪は苦笑いをして素早く帰りの支度を始めた。

『つえ、ちょっと待って！雪ちゃん！！観察って変な意味じゃなくてね、あの、聞いて！』

「・・・」

雪はもう一度席に座って雪の方を見る。

『雪ちゃんってさ』

「？」

『地味だよね』

「・・・帰る」

先ほどの倍の早さで立ち上がる雪。

『違う！そーじゃなくて、何というか素朴というか・・・良い意味で！』

「・・・」

雪は立ったままであかりに顔を向ける。

『あのね、今まで気づかなかった訳じゃないけど、雪ちゃんってありのままだなって思ってたの』

「ありのまま？」

『そう。雪ちゃんに初めて会ったときから、素朴だけどオーラのあ
る人だなって』

雪は腕を組んで、もう一度座る。

口下手なあかりは、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

『服装だってそんなに派手な訳じゃないのに人目を引くし、髪の毛
だってそう。綺麗だけど、伸ばしっぱなしでバイト以外は髪結って
ないからお化け・・・じゃなくて市松人形・・・でもないけど、そ
んな感じなのに様になってる！』

「それは・・・どうもありがとう」

あかりの滅茶苦茶な説明から、ようやく何を言いたいのか理解でき
た雪。

「褒めてくれてるの？」

あかりの顔がパツと明るくなる。

『そう！そうなのよー！だからね、もうちょっとおしゃれに興味持

つとかすれば、今よりもっと可愛くなると思うの!」

「・・・」

元気いっぱいのあかりの顔とは対照的に雪の表情は冴えない。

『どうしたの? おしゃれ嫌い?』

「嫌い。疲れるからそういうの」

『え、疲れる?』

「力をたくさん使うでしょ?」

『力???』

「うん。命が短くなるほど」 (事実)

『そんなに!?』

おしゃれなどというものをしたら、脱力モードがビューティーモードに入ってしまう。

自分を美しく保てば保つほど、美人科の命は削られるのだ。

「だから、私はこのままでいいの」

『何かもつたいないなあ』

「私が死んでも・・・いいの?」

『え!？それはよくないけど!!』というか、おしやれして死ぬなんて聞いたことないよ!』

まあ、それもそうかと雪は心の中で呟いた。

あかりには自分が美人科の人間だということは話していない。

大体、美人科が本当に存在するという事実を知っているかどうか。美人科というのは、カップとかツチノコレベルのレア度であるのだから。

雪はファミレスの帰り、歩きながら考え事をしていた。

危玲軍というのが年頃の美人科の人間の前に現れるってお父さんが行ってたけど、本当に来るの？

私もう19だし、十分年頃だと思うけどなあ・

ドンッ

ぼーっとしながら歩いていたせいか、雪は誰かにぶつかった。

「っあ、すみません。・・・?」

顔を上げると、そこには顔半分まで黒の洋服に身を包んだ男が三人立っていた。

雪は何か良からぬ事を頭の中で瞬時に描き、固まっていた。

「っ・・・」

『お前が東雲雪か?』

真ん中の背の高い男が問いかける。

「!？」

『そうなのか？』

迫るような問いかけに雪は身を固くした。

「そう・・・です」

すると右の男が口を開く。

『既にご存じかと思いますが、我々は危玲軍です。お迎えが遅れてしまい申し訳ありませんでした』

「危玲軍！？・・・あなた達が？・・・確かに危険そう・・・」

『お前は何か勘違いをしているようだ。我々のことをどのように聞いているのだ』

「それは・・・、

『あのね、雪？危玲軍っていうのはね、美人科の人間をさらって自分好みの女の子に教育して、挙げ句の果てには自分の嫁にしちゃう奴らなんだ！だから、声をかけられても絶っつつつ対ついていっちゃだめだよ？』・・・と父が」

『『『なんという父親だ・・・』』』

『それは完璧に誤解だ。だいたい、美人科には男もいる。我々は美人科の人間の味方だ。普通の人間世界には無駄にビューティーモードに入ってしまう事があるが、我々が用意した環境に来れば力

を使うことを最小限に抑えることが出来るのだ』

左の男がそう言うが、雪はまだ疑心暗鬼のようである。

「結局、あなた達について行くことに変わりないんじゃないや・・・」

『まあ、そういうことだ』

真ん中の男がそう言い放つ。

『お前の両親には既に話をしてある。あの父親は厄介だったがな』

「これは強制ですか？」

『ああ。早死にしたくなければな』

「・・・少し考えさせてください」

『お前は必ず我々の元に来る。考える事など必要ないだろう』

「・・・でも・・・」

『悟^{やどごち}様。考える時間くらい与えてあげてもよろしいんじゃないですか？』

『・・・仕方あるまい、だがあまり私を待たせるな。お前のために割いてやれる時間などあまりないのだからな』

右の男が良かったね、と顔で合図した。

「ありがとうございます・・・」

そして、考え事がまた一つ増えた雪は帰路についたのであった。

雪の決意。

「ただいまー…」

『おかえり。ん？雪、どうかしたか？』

月は知っていてそう言うのか。雪はじっと母親の顔を見る。

『…会ったのだな。連中に。この話は青人が帰って来てからにしよう。少々家の中が騒がしくなりそうだが』

「うん…」

雪はひとりになりたくなって、自室に入った。

「早死にはしたくないな…」

そして青人が帰って来た。

『雪ー！青人が帰ってきたぞ』

おおその事は月が話していたらしく、雪はいきなり本題に入ることができた。

「危玲軍って悪い人たちじゃないみたいなんだけど、お父さん？」

『っ…、いや、んーごめん。雪が美人科だって分かった時から、この日のための言い訳を考えてたんだ。だって、雪まだ19でしょ！

？
』

「もう19だよ」

『青人、いい加減踏ん切り付けろ。このまま私たちといると命が短くなるんだぞ』

月も完全に納得した顔ではないが、青人よりは心の整理が出来ているようだった。

『・・・そう、だね。わかってる、ごめんね雪。雪のしたいようにしよう』

「私は・・・」

雪は一瞬だけ考える仕草をしたが、すぐに答えた。

「私は、危玲軍の所へ行く」

『ん、わかったよ。雪、おいで』

そう言うとき青人は雪を抱き寄せた。

「お父さん？」

すらっと背の高い青人に、雪の体はすっぽりと収まった。

『はあー、雪ならそう言うと思ったよ。でも、危玲軍の奴らに嫌なことされたりしたらすぐに帰ってくるんだよ？』

「うん」

『明日、危玲軍が来るから、自分の気持ちをちゃんと伝えてね』

「わかった」

『雪、私の所へも来てくれ』

「お母さん？」

雪は、珍しく弱々しい母親の顔に驚く。

『何だ？私はいつも豪気だと思っているのか？』

「ううん。お母さんはいつだって優しいよ」

『雪・・・』

「会いたくなったらいつでも帰ってくるから」

『ああ、そうしろ』

こうして、両親に別れを告げた雪は自室に戻った。

「（私、絶対お母さんとお父さんより早くに死んだりしないから）」

そう心に誓ったのだ。

その後のリビングにて。

『青人、大丈夫か？』

『僕泣きそう。んゝー！』

『・・・私がいるのか？』

『月！！うわー愛してるうー』

『お前という奴は・・・相変わらずキモイな』

決意の夜に悪夢あり。

自分が美人科だと分かってから、朝と夜で人格が変わっていることを何となく分かってきた雪。

明日、危玲軍の元へ行くことを決意した昼間の雪の気持ちは、夜の雪へ変わっても変わることはなかった。

雪の部屋、窓辺にて。

「危玲軍かあー。あの悟一とかいう男の人、何か偉そうだったよなあ。あと、左の人も堅物そうだったし。右の人だけ優しい感じの人だったな・・・」

脳天気な夜の雪は、そんな事ばかり思い更けて、なかなか寝付けないたのであった。

やっと眠りについた雪は夢を見た。

「・・・・やですよ、そんなことー！死んじゃいます！！」

『これは私の命令だ。早く行ってこい』

「あの人たちの中に入ってスパイだなんて無理です。絶対無理です！」

『ごちゃごちゃ言うな。さっさと行ってこい』

ドンっ！

「いやあああああ！！！！！」

・・・・・・・・・・

「っは！はあはあ・・夢？なんかすごく嫌な夢だった」

辺りは薄明るくなってきている。

朝だ。

何やら悪夢を見てしまった朝の雪は、いつもよりかなりのローテンションである。

「スパイがどうとかって・・まあ、ただの夢だよね・・」

そう思い直した雪はゆっくりと起きあがる。

けれど、頭の中にはさっきの悪夢が渦巻いている。ブンブンと頭を振るがなかなか消えてくれない。

「正夢になったり・・なんてしないでね」

そう祈ってカーテンを開け、朝焼けに目を細める雪であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2911ba/>

BIJIN

2012年1月12日17時00分発行